

日被仰下之故也、昨日持參之處、御聯句無骨之間不進、他人無此類、余始而沙汰之、○中

ふる雨の晴ぬるあとや草の露 露也
こゑはうへなり萩の下かせ 御器 發句腋後日直進之

曉の月のいる後まともみて アケテ 茜

菊のうへはらへは露のあともなし 沓

鐘にかばかり夢ぞみしかき 粥

草にこゑある萩の下かせ 將基

立かへる旅とてたれをさそはまし 直垂

みるをはじめのあづまぢの末 道

春のくる方より花のほころびて 東方朔 莞此分可然之
由被仰下

山の尾上ぞまづかすみぬる 鎌 松山同

〔新增犬筑波集〕玉をつり緒の青柳の糸

春風にぶらめき渡る松ふぐり

永き日門にたてる傾城

傾城の門立といふなどは、まつふぐりととくゆゑなり、

〔我衣〕又寛保元年ノ冬、ナヅ付トテハヤル、點者ヨリ題ヲ出ス是ハ今ノ物ハ付ナリ、

赤イものは 黒イものは 車でする物は 四角なるものは くゝるものは

カヨウナル品十種ホドヅ、書テ、イヅレナリトモ心付タル題へ付ル、料十銅ニテ、一番勝百疋夫

ヨリダン、下ル、是モ赤艸紙ニ有、タトヘバ、

赤イものは 親の譲りの黒小袖

謎付